

4

幕末の徳山藩医・四熊宗庵の医療活動について

中澤 淳¹⁾, 亀田 一邦²⁾¹⁾ 山口大学, ²⁾ 九州国際大学

長州藩(萩宗藩および長府, 清末, 徳山, 岩国の4支藩を含む呼称)においては, 漢方による医療がおこなわれてきたが, 天保11(1840)年に萩宗藩に「医学所」が開設されると次第に蘭学がとり入れられるようになった。徳山藩でも, 既に開設されていた藩校鳴鳳館内の医学館で漢方・蘭方兼修の医学教育が始まった。領内富田村土井に16世紀から続く四熊家の13代目にあたる四熊宗庵(1833-1908)は, 幕末から明治期にかけて医師として活動したが, この地方医の残された記録をもとにして当時の医療状況を推察したい。

- (1) 大坂遊学(1851-1856): 嘉永4(1851)年18歳で大坂に出て, 古文辞派の藤澤東咳に儒学を学び, 吉益掃部に漢方内科を, 華岡南洋に漢方外科を学んだ。
- (2) 地元開業(1856-1865): 徳山藩に開業願いを提出し許可され, 安政4(1857)年富田村の自宅で漢方内科外科を開業した。
- (3) 徳山藩出仕(1865-1871): 慶応元(1865)年8月に徳山藩士に登用され, 第二次長征に備えて設立された徳山病院の第2病院, 次いで第3病院の総管に任命された。

明治元(1868)年, 戊辰戦争が東北から北海道まで拡大するなかで, 同年9月に宗庵は徳山藩庁から蝦夷地戦争の従軍命令を受けた。10月3日三田尻を出帆し, 日本海回りで11月6日に青森に到着, 翌明治2(1869)年4月まで青森を拠点として治療活動を行った。榎本軍降伏後も青森に留まり病人の治療をつづけたが, 同年6月28日に青森を出帆, 東京経由で7月20日に三田尻に帰還した。

藩庁へ提出した報告書によると, 治療した病人は総計64人であり, 長州から派遣された徳山藩敵功隊, 山崎隊, 宗藩の整武隊以外にも松前藩, 津軽藩, 備後福山藩の負傷者の治療も行っている。銃瘡治療は計51名におよび, 中には左右脛骨被弾により「大腿膝骨上辺より切り落とす」との記述もある。宗庵の活動に対して, 青森大病院で朝廷から, また帰国後徳山藩から報奨金が下賜された。

明治4(1871)年9月廃藩置県により徳山藩庁が廃止され, 宗庵の病院勤務は終了した。

- (4) 地元開業(1872-1883): 開業医に戻った宗庵は後進の指導に当たり10数名の医師を育てた。当時山口県は早期に西洋医学採用の方針を固め, いわゆる壬申考試により開業医を規定しようとした。宗庵は明治6(1873)年4月に山口医院において医術考試を受け, 明治11(1878)年月2月に山口県開業医第303号の免状が交付された。明治16(1883)年に宗庵は三男泰治に四熊家を継がせ退隠し, 詩文活動に入り, 詩集を編集し各地に碑文を書き残している。四熊家はさらに宗庵の5男程作, 次いで程作の長男濟夫へと引き継がれた。

昭和33(1858)年四熊濟夫博士から山口県立医科大学に古医書約300冊が寄贈されたが, その中には四熊家が18世紀末から医学教育を行ってきた私塾「見学堂」の蔵印がある書籍に加えて, 宗庵が使用したと思われる合信(ホブソン)による「全体新論」や「内科新説」などの漢文の英国医学書がある。銃創治療で活躍した宗庵は主に華岡流外科を行ったと推察される。一方, 蔵書の中には「斯篤魯默児砲痕論」(佐藤尚中訳述)がありこれを参照した可能性も残されている。

漢方医の地位が安定しない時期に, 医師としての実績と誇りを胸に納め, 医学の将来を次世代の後継者に託して生涯を閉じた宗庵からは, 同様の立場にあった同世代の医師の姿が想像される。